

平成 21 年 4 月 3 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520628

研究課題名（和文） 中国粵東地域における無縁の死者祭祀の偏差・伝播・歴史的変遷に関する民俗学的研究

研究課題名（英文） Folklore study on worship of unidentified bones and graves in eastern Guangdong, China: its variation, transmission and transformation

研究代表者

志賀 市子（SHIGA ICHIKO）

茨城キリスト教大学・文学部・教授

研究者番号：20295629

研究成果の概要：

本研究は、粵東（広東省東部）地域における無縁の死者祭祀に焦点をあてた民俗学的研究である。ここでいう無縁の死者とは、無祀の屍骨、海岸に流れ着いた水死体、祀り手の絶えた墳墓や位牌など、いわゆる無縁仏を指している。当該地域ではこうした無縁の死者の骨を埋葬した墳墓や位牌をおさめた祠が靈験ある神として信仰されている。本研究ではその多様な祭祀形態を明らかにし、清代から現代までの歴史的な変遷を考察するとともに、台湾の類似の信仰形態との比較研究を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,200,000	330,000	2,530,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：中国、広東省、民俗宗教、台湾、無祀枯骨、義塚、善堂、神霊観

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の発端は、1999年の夏、筆者が研究代表者を務めた科学研究費補助金奨励研究A「90年代中国広東省の宗教復興にみる伝統と創造：「グレーター香港」の形成と関連して」（1999-2000年度）において広東省東部の海豊県の村を訪れ、たまたま「聖人公媽」と呼ばれる無縁墓の信仰について調査したことから始まった。

周辺地域の調査を進めていくうちに、海豊県から陸豊市にかけてのこの地域では、こうした「聖人公媽」と呼ばれる神明の信仰がかなりの数分布しており、それぞれ複数の村から成る社や郷といった村落連合で共同祭祀

されていることがわかってきた。その後、海豊県から陸豊、惠州、揭陽、潮州、汕頭、梅州へと粵東地域一帯へ調査地を拡大していく中で、類似の信仰が海豊県だけでなく、潮汕地域から梅州などの客家地域にまで広がっていることを知った。そこで本研究では、まず当該地域における無縁の死者祭祀のバリエーションを明らかにすることを一つの課題とした。

これまでの無縁の死者祭祀をめぐる人類学的・民俗学的研究は、台湾の王爺信仰、有応公信仰など、鬼から神となった特定の神明（厲鬼）に対する信仰を対象として、民衆の鬼神観を分析する共時的なアプローチが主

流であった。だが、そうしたアプローチでは、特定の神明（厲鬼）をめぐる現在の鬼神観は明らかにできるが、歴史的にどのように変化してきたのかという視点に乏しい。本研究が構想したのは、当該地域の人々が無縁の死者に対してどのような扱いをとってきたのか、また無縁の骨や墓に対する宗教的心性がどのように変わってきたのかという問題について、国家の宗教政策、戦乱・疫病による大量死、成立宗教の影響といった要因を考慮に入れつつ検討するというものであった。いわゆる「厲鬼信仰」だけでなく、大量の無縁の骨を共同埋葬した義塚や善堂の「修骨」活動など、「信仰」未満の形態まで含めた広い意味での「無縁の死者祭祀」を研究対象としたのはそのためである。

台湾に眼を転じてみると、台湾には「有応公」や「義民爺」と呼ばれる無縁の骨や墓にまつわる信仰がある。「有応公」や「義民爺」の信仰が多く見られる台湾北部は、清代に粵東地域からの移民が入植したところであり、粵東地域の無縁の死者祭祀と台湾北部のそれとはなんらかの伝播関係がありうる可能性がある。そのため、研究対象地域に台湾を含め、無縁の死者祭祀の伝播と土着化をとらえることにした。

無縁の死者—日本では一般に「無縁仏」と呼ばれるが—の祭祀は、中国漢民族のみならず、日本、沖縄、朝鮮半島を含む東アジア全域に普遍的なものであり、東アジア共通の基層文化の一部を成している。この基層文化の上に、外来の仏教、道教信仰や土着の鬼神崇拜が習合し、地域ごとに特色ある宗教文化伝統が形成されてきた。中国での当該分野に関する研究は、台湾や福建省を除いては、ほとんど未開拓というのが現状である。粵東地域を対象とする本研究は、この分野に新しい資料を提供し、将来の比較研究に寄与すると確信し、本研究課題を申請した。

2. 研究の目的

- (1) 粵東地域における無縁の死者祭祀のバリエーションとその分布を明らかにする。対象地域は海陸豊地域を中心として、潮汕、客家地域を含める。
- (2) 海陸豊地域における無縁の死者祭祀の、清代から民国期を経て、改革開放以降の現状に至るまでの変遷を明らかにする。
- (3) 無縁の死者祭祀の粵東地域から台湾への伝播と土着化について明らかにする。
- (4) 粵東地域と関係の深い台湾北部の有応公や義民信仰の事例と粵東の無縁の死者祭祀の事例とを総括的に比較分析することによって、当該地域における無縁の死者の神霊としての意味づけとその変遷を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は主として、現地の人々への聞き取り調査を主とする民俗学的な研究方法に依拠して進められた。

実際に行った方法とは、現地の方言を普通話か広東語に通訳できる研究協力者を同行して、対象となる無縁の死者祭祀の観察（墓や廟の形態、神像、墓碑銘、位牌、対聯の文句、祭礼の実態）を行うとともに、祭祀の関係者や周辺住民に聞き取りを行うというものであった。聞き取り調査は、話者が語ったことを録音しつつ、研究協力者にその場で中国語の普通話か広東語に訳してもらい、ノートに記録した。その後もう一度録音した話を協力者とともに聞き、内容を確認するという作業を行った。

地方の民俗宗教に関する歴史的変遷を知るためには、文献資料も参考にすべきであると考え、少なくとも調査した地域の地方志についてはできる限り眼を通した。だが、本研究が扱う「聖人公媽」のような信仰は、地方志にはまったくといっていいほど出てこない。中国の場合、一般的に言って、郷、村、社レベルの廟で地方志に記載されているものはごくわずかであり、また記載されていたとしても、廟の名前と祭神のみということも少なくないのである。

では近年編纂された県志や市志や文史資料ならばどうかといえば、こちらも媽祖信仰や三山国王信仰や玄天上帝には頁数を割いても、聖人公媽の信仰などはまったく無視されているというのが実情である。

そこで民俗学が得意とする聞き取り調査が効力を発揮するわけだが、聞き取り調査が万能というわけではない。現在 60 代から 70 代では、宗教活動が禁止されてからの時代しか知らない人が多数を占めつつある。

地方志にはまったくといっていいほど記載されておらず、碑文もほとんどなく、人々の記憶も曖昧という民俗宗教の歴史を研究するにあたって、代表者はこの地域一帯に見られる類似の信仰対象についての資料を、口承、書承を問わず、できるだけ多く集めることにした。口承資料は聞き取り調査による由来や靈驗譚、文字資料は墓碑銘や碑記などである。これらの資料から建立・改修年代や建立の経緯のデータを集め、全体的な変遷の傾向をとらえるようにした。

台湾の場合は、時間が限られていたため、聞き取り調査ができた事例はそれほど多くはないが、有応公や義民爺信仰については、多くの先行研究があるため、それらを参照した。

4. 研究成果

(1) 研究成果の概要

研究目的で挙げた 4 つの課題に沿って、本研究の成果の概要を述べる。

①本研究では海陸豊地域を主な対象地域として「聖人公媽」と「百姓公媽」と呼ばれる無縁の骨や墓にまつわる信仰形態の特徴とバリエーションを明らかにした。海陸豊地域の「聖人公媽」祭祀の特徴は、以下のとおりである。

- ・聖人公媽の多くは墳塚や牌位の形態をとっており、廟があるものはない。墓碑には「聖人公媽之墓」や「義塚」などと刻まれている。聖人公媽の墓の周辺には、大量の無縁枯骨を埋葬した義塚や「古先人」などの無縁墓が建てられていることが多い。漂着した骨が単体で葬られている場合もあるが、百体以上の骨が葬られているとされる場合もある。複数の骨が埋葬されている場合でも、ある特定の骨について、金斗に脚が入りきらなかったなど、普通の人よりも身体が大きかったといった身体的特徴が語られることがある。

- ・聖人公媽の来歴について語り伝えられている伝承では、大王、将軍、官僚、元帥、総兵など、おおむね高い身分や官職に就いていたとされ、特定の姓を持つこともある。聖人公媽の来歴は、聖人公媽が乩童に憑依し顕聖することによって明らかにされることがある。人々はこうした墓を、「公媽」（ご先祖様）、「老太公媽」（ひいお爺さんとひいお婆さん）などと呼んで、祖先と同様に手厚く祭祀するが、その土地に定着した宗族の始祖とは見なししていない。

- ・各地の聖人公媽の碑文には、ほぼ共通して「威靈顕赫、保佑合境」という文言が含まれており、聖人公媽が際立った霊力を持つ神であること、また村全体を守り、村境内の老百姓を庇護する神であることが強調されている。

- ・聖人公媽は、複数の村から成る社、郷、約といった村落連合組織を単位として、定期的に共同祭祀されている。共同祭祀を行う単位は、同一の始祖から発展した宗族が集住している地域であることが多いが、雑姓が混在する市場町の場合もある。共同祭祀は旧暦3月、7月、11月に行われ、7月は中元普渡、11月は太平清醮と呼ばれる。祭祀費用としての「丁口銭」の徴収は、聖人公媽の祭祀が共同体成員の公平な負担で行われる共同祭祀であること、また「丁口銭」は他所に移住した人たちからも徴収することから、聖人公媽の庇護を受ける共同体成員の条件とは、現在どこに居住しているかに関わりなく、その土地の生まれという属性にあることを示している。

- ・聖人公媽の建立時期の正確な年代は多くが不明である。調査地域の宗族は明代初期に福建から移り住んだという伝承を持つが、それとほぼ同じ時期、つまり5百年以上の歴史を持つとされる聖人公媽もある。新しいもので

は民国初期に建立されている。聖人公媽の性格とは、常に腹を空かせて漂い、人々に悪さをする孤魂野鬼を慰撫し、統率する「鬼王」という性格である。聖人公媽の鬼王としての力は、自身も出自は無縁の骨という「鬼」でありながら、福をもたらしてくれる「神」でもあるという、神と鬼の境界に位置する両義的な存在であるところから生まれてきたものであると考えられる。

- ・聖人公媽にまつわる数々の霊験譚は、聖人公媽の「神」としての性格を強調している。そこでは、聖人公媽は農民、漁民たちの素朴な願いに応え、民衆を苦しめる権力者を懲らしめ、悪事を暴く公明正大な神として語られる。

②この他、海豊県には、「百姓公媽」と呼ばれる無縁墓も点在する。「聖人公媽」と「百姓公媽」はいずれも無縁の死者を祀った墓や塚であり、霊験があるという点において変わりはなく、また人々は「聖人公媽」と「百姓公媽」という呼称を明確に区別して使い分けられているわけではない。

③海陸豊地域から粵東地域に広く眼を向けてみると、聖人公媽と共通する要素を持った神霊は、名称や伝承の詳細は異なっているものの、比較的高い頻度で眼につく。「聖人公媽」との共通点を挙げてみると、以下のようになる。

- ・水死体や浜辺に漂着した骨、掘り出された複数の骨が埋葬された墳墓や塚、または牌位の形態をとっている。廟があるものは少ない。

- ・脚の骨が長かったなど、普通の人よりも身体が大きかったといった身体的特徴が語られることがある。

- ・「将軍」、「元帥」、「義士」など、戦争で亡くなった死者と見なされていることが多い。

- ・村や社といった基層の社会組織やその連合によって共同祭祀が行なわれている。祭祀は中元節に行なわれるのが一般的であるが、春、夏、秋の年3回行なうところもある。

- ・大変霊験がある。またシャーマンに憑依して語る、顕身する、夢に顕れるなどの形で墓の特定や改修を促すことがある。これらの現象は「顕霊」、「顕聖」と呼ばれる。

- ・陰間の孤魂野鬼を統率し、鎮める力を持つとされる。また村や社など共同体の守護神的な性格を持つ場合もある。

海陸豊の「聖人公媽」の場合、その由来譚は茫漠としており、姓や官職が特定されるのみであったが、潮汕地域や梅州地域の事例において注目されるのは、南蛮を平定した宋代の将軍、明末に清朝軍に抵抗して戦死した義民というように、特定の時代や歴史的イベントに結び付けられている点である。あるいは元朝と戦った文天祥率いる宋軍の元帥であると

か、儂智高の叛乱を平定するために派遣された狄青配下の将領であるなど、歴史上よく知られた英雄に付会される事例もある。

歴史上の特定の人物への付会は、第1に、知識人の関与によるものが考えられる。宋軍の元帥とのみ伝えられてきた墓に、文天祥や狄青といった歴史上の英雄的人物を結び付けるのは、知識人が民間の祠廟を地方志や郷土志に記載したり、記念碑を建立したりするとき、すなわち伝承がテキスト化されるときにしばしば行われる操作の1つである。第2に、芝居や語り物の影響が考えられる。粵東地域の事例では、楊文広が南蛮を征伐した時の将軍とされているものが複数あったが、これは潮州劇で人気の高い演目「楊文広平十八洞」の影響が大きいと思われる。第3に考えられるのは、シャーマンの関与である。骨や墓の主は、夢に現れて骨のありかを伝えたり、乩童に憑依して自らの来歴を語ったりすることがある。シャーマンが知識人であれば、歴史上の特定の事件や人物に仮託して語ることもあったと考えられる。

④海陸豊地域の聖人公媽の事例と粵東地域の類似の信仰形態を総合し、本研究では単なる無名の鬼から聖別されて神になるプロセスを以下のように結論づける。宋代以降北方から漢人が大量に入植し、先住民族や海賊との戦いが絶えなかった粵東地域では、戦死者らしき枯骨や流れ着いた溺死者の骨に遭遇することは珍しくなかった。明代以降この地域に移住してきた人々は、そうした骨が見つかり、埋葬して「古先人」と刻んだ小さな墓石を建てたり、金斗に納めて廟や洞穴に置いたりして祀ってきた。骨がまとまって出現した場合には近隣の住民が金を出し合い、義塚を建立することもあった。やがてその一部が福をもたらす、病気を治す、悪人を懲らしめるなど、さまざまな形で「顕霊」し、時にはシャーマンに憑依して自らの来歴を語ったり、「顕身」したりすることによって聖別され、神として祀られるようになった。やがてその靈験の恩恵を受けたその土地の宗族によって定期的に祭祀され、一部は郷や社の守護神と見なされるようになり、複数の村から成る地域連合において、共同祭祀されるようになった。

⑤こうした無縁の死者の祭祀形態に大きな変化をもたらしたのは、善会、善堂による「収屍(骨)」、「修骷髏」、「修建義塚」活動の伝播と定着である。海陸豊と隣接する潮汕地域では、清代中期頃から施棺や無祀の屍骨の「掩埋」を主要な活動とする善会組織が見られるようになり、清代末期にかけて激化した械闘や疫病、飢餓の蔓延による大量死の発生とともに、その分布地域を拡大していった。

陸豊県では清末以降、海豊県では80年代以降に、組織的に無縁骨を回収して義塚を建立する善堂のシステムが普及し、定着した。新しく建立された義塚は「百姓公媽」と呼ばれ、宋大峰祖師の名前が刻まれるようになった。

善堂の普及は、無縁の死者の祭祀形態や名称を変化させただけでなくとどまらず、聖人公媽の神霊としての意味を変化させたり、周縁的な信仰へと追いやったりする可能性を含んでいる。近代の善堂の前身となった施棺掩埋の善会は、正しい埋葬の礼法を宣揚し、儒教の孝道を説く、いわゆる社会教化を第一の目的としていた。儒教的な祖霊観を持った善堂から見れば、祀り手を持たない、誰とも知れぬよそもの骨を神として崇める聖人公媽は、「淫祀」以外の何者でもない。

陸豊市の善堂には、善堂の片隅の「孤魂由子」を祀った祭壇を「聖人公媽」と称しているところがある。また陸豊市の中元節では、「街道」(町内会)ごとに設置された普渡の供物台の祭壇に、「聖人公媽之位」という紅い紙が貼られる。海豊県では孤魂を統率し、鎮める「鬼王」としての役割を付与された聖人公媽が、陸豊市の善堂では、孤魂そのものと見なされ、完全に鬼のカテゴリーへ封じ込められている。一方で、1980年代以降に建立された新しい「百姓公媽」の墓碑銘にはすべて「宋大峰修理」と刻まれていることから示されるように、孤魂を統率する「鬼王」としての役割は、善堂が祖師として祀る宋大峰にとって代わられつつある。

この他、国家公認の正統宗教とされる道教や仏教の知識の普及も、聖人公媽の影を薄くする。道士が行う普渡の儀礼では、危険な鬼を統率する神格として、恐ろしい形相をした巨大な大士爺の像が置かれる。海豊県の聖人公媽には、「大士將軍」、または「大士聖人公媽」と称しているところが見受けられたが、これらは聖人公媽と大士爺の性格が重なっているところから派生した名称ではないかと考えられる。さらに仏教では、陰界の鬼を支配する地蔵菩薩がいる。ある事例では、改修された義塚の傍に地蔵廟が建てられ、多くの信者を集めている。同じような機能を持つ神格であれば、仏教や道教の神格のほうが正統的と見なされやすく、知識人にも受け入れられやすい。文字で伝えられてきた成立宗教の知識と口頭で伝えられてきた民俗知識には、行使しうる権力において圧倒的な差があり、前者が後者を駆逐することは決して珍しいことではない。

⑥無縁の死者祭祀の伝播をテーマに含める本研究では、粵東地域の無縁の死者祭祀と台湾北部の有応公や義民爺信仰との間に直接の伝播関係があるのかどうかを検討する予定であった。だが、結果としてこのような研

究を行うことはほとんど不可能であるということがわかった。たとえば台湾のある有応公を信仰している地域集団が粵東地域のどこから渡ってきたのかを調べた上で、両地区の無縁の死者祭祀の現状を調査し、比較したとしよう。たまたまどちらにも同じような無縁の墓や骨の信仰があったとしても、大陸側の信仰が、移民が始まる清代初期以前からあったかどうかを証明するには資料が乏しく、また一方台湾側の信仰についても、台湾移住以後別のエスニックグループの信仰や他宗教の影響を受けて発生した可能性も十分考えられるからである。

ただし台湾北部の有応公の中には、清代に粵東地域から入植した漢人が、畑から掘り出されたり、海岸に打ち上げられたりした無祀枯骨を、大陸で行っていたのと同じやりかたで祀り、類似の名称で呼んだものもあったと思われる。ちなみに新竹市には、「聖公聖媽」という名前の無祀枯骨を祀った廟が複数現存する。これなどは「聖人公媽」を彷彿とさせる名称である。

粵東地域と台湾北部地域の間にはかつて人の移動があり、両地域の無縁の死者の祭祀形態はほぼ構造を持っているということから、両者の間に伝播関係が存在する可能性があることは少なくとも間違いない。だが本研究では、両者の間に伝播関係がありうることを指摘するだけにとどめ、それよりも「有応公」とくくられる無縁の骨や義塚の信仰の実態を現地調査によって明らかにし、粵東地域の事例との構造的な共通点をとらえるようにした。

一口に「有応公」、「義民爺」といっても、その祭祀形態はバリエーションに富んでおり、名称も、規模も多様である。だが、すべての事例に共通するのは、戦死者や身寄りのない死者の屍骨を埋葬した義塚や無名の墓、掘り出された白骨、海岸に流れ着いた溺死者の骨など、無祀の骨や墓が信仰対象となっているという点である。

「有応公」の廟の祭祀組織は、近所の住民だけで寄付を集め、簡単な祭祀を行うだけのものから、新竹県のいくつかの「万善公」のように、広域にわたる地域連合で、毎年順番に共同祭祀を行う大掛かりなものまで非常に幅広い。中には桃園県楊梅鎮「集義祠」のように、その地域の公廟と目されているものもある。

「万善公」の建立は義塚の設置と機を一にしており、義塚の設置は地域の開発の歴史と深く関わっている。地域の発展に伴い、廟の規模は大きくなり、名称も変化する。万善公の名前の由来は、義塚や廟に「万善同帰」と刻まれた碑石が安置されたことから来ているが、「万善同帰」は仏教に由来する言葉であり、おそらく僧侶や地域の知識人が関与し

たことによって、こうした名称と形式が普及したのだらうと思われる。

だが「万善公」という名称が定着する以前は、別の呼び方もあったようである。新竹県荳仔埔地区の公廟である北和宮は、240年前に創建された万善公廟であるが、建立当時は「聖媽公」と呼ばれていた。清代竹塹地区の開墾が始まった当初は、荳仔埔地区にも埋葬されず放置された無主の死者の屍骨がそこに見られ、後に地元の士紳が骸骨を埋葬して祀ったのが、この万善公廟であった。万善公廟は民国79年に「北和宮」と改称し、改築して2階に地藏王菩薩、1階に万善爺を祀った。

新竹市には「聖公聖媽」や「聖媽」を祀った廟が多く見られる。「万善公」、「万善爺」という名称が普及する以前には、「聖公聖媽」という呼称が多く使われていたとすれば、海陸豊地域の「聖人公媽」との関連性も考えられる。

「大衆爺」を祀った大衆廟は、異郷で客死した死者を埋葬した義塚やその傍に設置される厲壇を前身とするものが多い。また大衆爺は、大衆廟の傍に地藏庵が作られたり、地藏菩薩の配祀神として祀られたりするなど、仏教と習合する例が多く見られる。さらに、大衆爺の中には名や姓を持ち、戦死した将軍や元帥、官兵であるという伝承を持つものもある。

客家族群の象徴的な信仰と目される新竹県新埔鎮枋寮里の褒忠亭義民廟は、殺された義民の屍骨を埋葬した義塚の建立を発端しており、万善爺や大衆爺と同様、無縁の死者の信仰である点においては変わらない。万善公の中にも、富岡伯公岡の「集義祠」のように、広域に跨る複数の聯庄によって持ち回りで祭祀されているところもあり、祭祀形態という点でも、義民爺と万善爺はほぼ共通している。義民爺は、神霊の意味づけという点でも、祭祀規模という点でも、万善公の突出したケースと見ることができる。

結論として、台湾の有応公、万善爺、大衆爺、義民爺と呼ばれる無縁の骨や墓の信仰は、粵東地域における聖人公媽や将軍、元帥、義士などと呼ばれるものと重なる部分が極めて多いことが明らかになった。

(2) 研究成果の位置づけ

本研究の成果は、粵東地域における無縁の死者祭祀の形態という、これまで地域から言っても、また研究対象から言っても、ほとんど研究されてこなかった領域について、現地調査による豊富な事例を提供した点で、国内外で大きな評価を受けている。また善堂と義塚という、歴史学では儒教的価値観に基づいた実践ととらえられるのみであった形態を、民俗学的な観点から、その多様な意味を明らか

にしたという点で、歴史学の善堂や義塚研究に新しい視点と資料をもたらした。さらに、台湾独自の信仰と思われていた有忠公や義民爺を、台湾と関連の深い粵東地域の事例と比較することで相対化し、その普遍性と地方性を見極める視点を提供した。

(3) 今後の課題

以上の研究成果を踏まえて、今後さらに研究しなければならない課題として3点挙げる。
①粵東地域の事例にみられる伝承は、文天祥や楊文広など、宋元時代の異民族と戦った英雄に付会されているという点で共通していた。今後は、無縁の死者の伝承と地方に残された歴史的記憶としての民間伝承がどのように結びついていったのか、すなわち無縁の死者と土地の記憶という観点から、さらなる資料収集を行いたいと考えている。

②本研究を通して、無縁の死者の祭祀形態は地域の開発の歴史と関わっていることが明らかになった。粵東地域及び台湾北部では、儒教的価値観を持った士大夫階層が、善堂や義塚が設置するようになった時期は、乾隆初期以降という点でほぼ共通している。今後は、これ以後、両地域が辿った歴史の違いを考慮に入れながら、両地域の人々の無縁の死者に対する宗教的心性の違いを考察していきたいと考えている。

③台湾の義民廟は「有忠公」や「万善公」といった無縁の死者の祭祀形態の象徴資本化が進んだものであると考えられる。とくに新竹県の褒忠亭義民廟は客家文化運動の拠点となってきたところであり、無縁の死者祭祀を中核としたローカル・アイデンティティの形成という観点から、さらなる検討を深めていくつもりである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

①志賀市子「中国広東省潮汕地域の善堂—善拳と救劫論を中心に」『茨城キリスト教大学紀要』第42号、41—60頁、2008年、査読無

②志賀市子「民国期広州の道教系善堂—省躬草堂の活動事業とその変遷」『中国—社会と文化』第22号、148—164頁、2008年、査読有

〔学会発表〕(計5件)

①志賀市子「中国粵東地域における無縁の死者祭祀の諸相」関西大学アジア文化交流研究センター第12回研究集会、2008年12月6日、関西大学

②志賀市子「近代広東道教と南洋華僑ネットワーク—嶺南先天道のタイへの展開を中心に」日本華僑華人学会2007年度大会、2007年11月17日、慶応義塾大学

③志賀市子「先天道在嶺南地区的發展—兼談清遠飛霞洞與有關文献」香港中文大学道教研

究中心主催「先天道—歴史與現況研討会」、2007年9月22日、香港中文大学

④志賀市子「潮汕善堂的善拳與救劫論—兼論清末扶鸞結社運動的普遍性與地域性」台湾仏光大学主催「二十世紀中国宗教運動與救贖団体国際學術研討会」、2007年6月12日～13日、台湾仏光大学

⑤志賀市子「中国・粵東地域における無縁の死者の祭祀の諸相—聖人公媽から善堂まで」慶応義塾大学東アジア研究所主催「東アジアにおける宗教文化の再構築」研究会、2006年10月6日、慶応義塾大学

〔図書〕(計1件)

志賀市子「中国粵東地域における無縁の死者祭祀にみる変化と持続—海陸豊の「聖人公媽」祭祀を中心に」鈴木正崇編『東アジアにおける宗教文化の再構築』風響社(印刷中)

〔その他〕(計1件)

志賀市子『科研報告書 中国粵東地域における無縁の死者祭祀の偏差・伝播・歴史的変遷に関する民俗学的研究』106頁、2009年3月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志賀市子 (SHIGA ICHIKO)
茨城キリスト教大学・文学部・教授

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し